

第一回 桃園とうえんに宴うして三豪傑さんこうけつ義を結ぶ、張翼ちやうよくとく徳怒とくつて督郵とくゆうを鞭むちうつ

—— 桃園の誓い ——

『三国志演義さんしやくしえんぎ』の冒頭は、「天下の大勢たいせいは、統一が長ければ必ず分裂し、分裂が長ければ必ず統一されるもの」という書き出しではじまります。そして、その最後も、この同じ言葉で締めくくられます。

このように、『三国志演義』には、過去の歴史から汲み取った「一治一乱いつちいちらん」という歴史観が根底にあります。ですから、多くの英雄豪傑えいゆうこうけつが活躍し、そして消えていくのですが、読み終わってもそこにあまり悲壮感はありません。一つの時代が終わり、また次の時代へと移っていくのだという達観たつかんともいえるものがあります。思い入れのある『三国志』関連の書籍とは違う、どこかあつけらかんとした雰囲気ふんぎが漂ただよいます。

さて、『三国志演義』は、後漢末ごかんまつの争乱らんせんを背景に、それまで無名であった劉備りゅうび・関羽かんう・張飛ちやうひの三人が、義兄弟の契ちぎりを結び乱世らんせいに乗り出していくところから始まります。そして、三人の強い絆きずなが、この物語の中を主旋律しゅせんりつのように流れていきます。

劉備は漢室かんしつの末裔まつえいですが家は貧しく、勉強嫌いで遊び好き。しかし、人をひきつける不

思議な魅力みりよくをもっていました。関羽は罪を犯した放浪者ほうろうしや。張飛は三人のなかではいちばん裕福でしたが、それでも大金持ちというわけではありません。

乱世らんせは、腕に覚えのある者や才ある者にとつては、自分の力を思う存分發揮はつきできる晴れ舞台です。天下泰平てんかたいへいの時代であれば、おそらく三人は歴史に名を残すことはなかったでしょう。そんな三人が、力を合わせて後に蜀しよくを建国することになるので、乱世に機会を得て歴史に名を残した典型的な例といえるでしょう。

清代しんの歴史家趙翼ちやうよくは、その著『二十二史劄記にじゅうにしきき』で「人才じんさい、盛んなること三国にしくは莫なし」と述べています。また、魯迅ろしんは『中国小説史略ちゆうごくしやうせつしりやく』で、「三国時代は英雄が多く、武勇ぶゆう知謀ちぼうともにスケールが大きく感動的」と述べています。

およそ百年間の三国時代ですが、多くの英雄・豪傑の人間群像まを目の当たりにできることも、『三国志演義』の大きな魅力になっています。

『水滸伝すいこでん』も『三国志演義』と並び、中国で最も多く読みつかれてきた小説ですが、『三国志演義』は、「実事七分、虚構三分じつじしちぶ きやうこうさんぶ」といわれて史実しじつに基づく部分が多く、事実の重みという点で、虚構中心の『水滸伝』は『三国志演義』の面白さには一歩及ばないような気がします。

また、劉備・関羽・張飛の三人が、権謀術数や裏切りが常態化する時代にあつて、若き日の誓いのままに生きぬく姿には、時代を越えて輝く人間としての「心の美しさ」を感じとることができるでしょう。

(本文抄)

後漢王朝も終わりに近づくと、天子の側近の十人の宦官が権力をにぎり、十常侍とよばれていた。彼らはやりたい放題で横暴をきわめ、政治は日に日に悪くなり、民衆は秩序の転覆を願い、盗賊が各地にむらがり起こつた。

そのころ、張角・張宝・張梁という三兄弟がいた。兄の張角は、もともと落第した秀才で、ある日、山の中で出あつた南華老仙と名のる老人から「太平要術」という巻き物をさずかり、朝な夕な修行にはげんだ結果、風をよび雨をふらせることができるようになった。

中平元年(一八四)正月、疫病が流行したとき、張角はお札と水をのませて人々の病気をなおし、「太平道人」と名乗つた。五百人を越える張角の弟子は、各地に散らばり布教にあつた。彼らはみなお札を書いたり呪文を唱えたりすることができた。それが評判で

何万という民衆が集まってきた。張角は天下をのつとる野心をいだいて兵をあげると、彼につき従った者は四、五十万にもものぼった。「蒼天已に死す。黃天まさに立つべし。甲子の年（中平元年を指す）に、天下は大吉」と言い広め、家の表門に「甲子」の二字を書かせた。反乱軍は黄色の頭巾をかぶっていたので黄巾軍とよばれた。その勢いは強大で、官軍は戦わないで逃げ散った。そして、張角の一軍が、河北の幽州に侵入した。

（解説）

後漢末、皇帝側近の宦官が権力を握り、政治を壟断する様子が述べられます。常侍とは中常侍のことで、当時の宦官の最高官です。このとき十人いたので十常侍といわれました。時の皇帝靈帝の身近にいて、大きな権勢を振るっていました。そして社会不安が広がるなか、張角兄弟が、民衆を糾合して反乱を起こします。黄巾の乱の勃発です。

この張角の教団は太平道とよばれ、当時、西の張陵の五斗米道とともに、原始道教の起源になります。太平道は黄巾の乱で壊滅しますが、一方の五斗米道は曹操に降つて優遇され、その後いくたの変遷をへて、現在の道教のもととなります。指導者は張天師といわれ、中国革命後、台湾に亡命して現在にいたっています。

道教には超人的な妖術を使いこなす「道人」がいて、『三国志演義』の張角や『水滸伝』の公孫勝など、中国の小説ではしばしば登場します。

(本文抄)

幽州の長官の劉焉は、反乱軍を討つため義勇兵募集の高札をたてることにした。その高札が涿県にも立てられたとき、これに応じて一人の英雄があらわれた。

この人は、学問はあまり好きでなかったが、性格は温和で口数は少なく、喜怒哀楽の感情を表に出すことはなかった。かねてより大志を抱き、もつぱら天下の豪傑と交わりを結んだ。

身長は七尺五寸、手を伸ばせば膝の下までとどき、両耳は肩までたれさがつて自分の目で見ることができ、顔は冠の玉のように白く、唇は紅をさしたようだった。中山の靖王劉勝の末裔で、漢の景帝の玄孫(孫の孫)にあたる。姓は劉、名は備、字を玄德といった。劉備は幼くして父を失い、母に孝行を尽くし、家が貧しかったため、草鞋を売ったり蓆を編んだりして生計を立てた。

このとき、劉備はすでに二十八歳であった。彼は高札をみながら、思わず深いため息を

ついた。

するとうしろで、「大の男が、国のためにはたらこうともせず、どうしてため息なんかつくんだ」と、背後から大声でどなる者がいる。

ふりかえつてみると、身長八尺、豹ひょうのような頭にドングリ眼、燕つばめのような顎あごに虎ヒゲ、雷らいのような大音声だいいんじょう、暴れ馬ばうばのように威勢いせいのいい男である。

劉備はその並々ならぬ風貌ふうぼうを見て、名前をきくと、「おれは、姓は張、名は飛、あざな翼徳よくとくと申す。先祖代々、涿郡たくくんに住み、田地田畑もいささかあるが、酒を売り豚肉あきなを商あきないながら、つねづね天下の豪傑と交わりを結んでいる。いまおぬしが立て札をながめながら、ため息をついているのを見て、つい声をかけてしまったのだ」。

「私はもともと漢王朝の血筋ちすじで、姓は劉りゅう、名は備びという者です。いま、黄巾の一味が反乱をおこしたことを知り、賊を破つて民を救いたいという気持ちになりましたが、残念ながらその力がありません。それでため息をついていたのです」と劉備。

「わたしはいささか金の用意がある。これで、このあたりの腕うでつ節ぶしの強い者を集め、おぬしとともに旗あげしようではないか」と張飛。

張飛のことばをきいて、玄德は大いに喜び、村の酒屋へいき、二人で酒を酌み交わして

いると、一人の偉丈夫いじょうぶが入ってきた。

見ると、身長は九尺、ひげの長さ二尺、顔は熟じゆくしたなつめのように赤黒く、くちびるは朱のように赤く、鳳凰ほうおうの目に、蚕かいこのようなまゆ毛、堂々とした顔だちで、威風りりんとしている。

劉備が名前をたずねると、「わたしは姓は関、名は羽、あざなは長生ちようせいといい、のち雲長うんちようと改めました。河東かとうの解良かいりよう県の者です。土地の豪族で目にあまる振る舞いをしたやつを打ち殺したため、ほうぼうをわたり歩きましたが、賊を討つ義勇隊ができたと聞いて志願しに来たのです」と。

かくして三人はうちそろって張飛の家に行き、旗あげの相談をした。

張飛、「おれの屋敷のうらに桃畑がある。ちようどいま花ざかりだ。そこで、われら三人、兄弟ちぎの契ちぎりをむすぼうではないか」。

こうして翌日、桃園に黒牛・白馬などの犠牲をそなえ、香をたいて、誓いのことばを述べた。

「ここに劉備・関羽・張飛の三人は、姓は異なるけれども兄弟ちぎの契ちぎりをむすび、心を一つにして力をあわせ、苦難の人をすくい、上は国家の恩むくに報い、下は人々を安らかにしたい。

同年同月同日に生まれあわせなかったのはやむをえないが、願わくは同年同月同日に死ぬ。天地の神々よ、われらの真心をご覧あれ」と。

こうして劉備を兄、関羽を次兄、張飛を弟ときめた。村の腕っ節の強い者にも招集をかけて三百人以上が集まったので、一緒に桃園で痛飲し酔いつぶれた。

次の日、通りかかった商人がかれらの志を喜び、良馬五十頭、金銀五百両、鉄一千斤を差し出した。

劉備は雌雄一对の双股劍、関羽は重さ八十二斤の青竜偃月刀を、張飛は長さ一丈八尺の蛇矛をつくらせた。

(解説)

黄巾の乱は北方にも波及し、劉備らが住む幽州でも義勇兵の募集が行なわれます。

後漢末の地方区画は州―郡―県とわかれ、州(長官は刺史または牧)は現在の日本でいえば関東・近畿地方など都道府県の上、郡(長官は太守)は都道府県、県(長官は県令)は市に相当します。当時、十三の州があり、幽州は一番北に位置します

劉備の人柄について、『三国志演義』は「温和で口数は少なく、喜怒哀楽の感情を表に

出すことはなかった」としますが、歴史書の『三国志』では、「弘毅寛厚こうきかんこうにして、人を知しり士しを待たいす」（度量どりようが広く意志が強い、心が大きくて親切、人の才能を見ぬいて用いる）などの長所をあげています（『三国志』先主伝せんしゆでん）。毅然きぜんとした強さとともに、人々を包容する心の深さをもっていました。ただし、これに続けて「機權幹略きけんかんりやくは魏武ぎぶに逮およばず（權謀術数けんぼうじゆつすうは曹操そうたうに劣る）」（同前出）と書いています

劉備の身長については、『三国志』でも同じく七尺五寸しやくすんとあり、この時代の一尺は約二十三cmですから、一七三cmぐらいです。手は長くてひざの下までとどき、両耳りやうみみは肩までたれさがって自分の目で見ることができません。ここまでは『三国志』の記述と同じですが、次に『三国志演義』は、顔は「冠かんの白玉はくぎよくのごとく、唇くちびるは紅べにをさしたよう」として、まるで女性のような顔立ちにしています。このイメージを一番うまく表しているのは、かつてNHKで放映された「人形劇三国志」の劉備だと思えます。

年齢については、『三国志演義』は、このとき劉備を二十八歳とします。しかし『三国志』によれば、劉備は二二三年に六十三歳で亡くなりますので、黄巾軍が幽州に侵入する一八四年の時点では、劉備は二十四歳になります。したがって『三国志演義』が二十八歳とするのは、年齢を間違えたのだとされます（『三国志演義』の注…立間祥介たつましやうすけ訳、平凡社）。

しかしこれは、作者があえて二十八歳にしたのだと考えたほうがいいでしょう。この場面では劉備を二十四歳にすると、都合の悪いことがあるからだと思います。

劉備が最年長、次いで関羽、その次が張飛です。このとき劉備を二十四歳にすれば、年齢が定かでない関羽や張飛は二十歳前後と想定されます。ひよっとしたらハイティーンかもしれません。張飛の容貌は「豹ひょうのような頭にあこ、燕あこのような顎あこに虎ヒゲ」ですから、年齢とちぐはぐなイメージになるんじゃないでしょうか。二十歳前後で顔は虎ヒゲでは、いくらなんでもそぐわないと誰でも感じます。

ちなみに『三国志演義』は、後に張飛が殺されたとき、その年齢を五十五歳としています。実際に張飛が亡くなるのは二二一年ですから、『三国志演義』の五十五歳から逆算すると、生まれは一六七年になります。そうすると、「桃園結義とうえんけつぎ」の時の張飛の年齢は十八歳になります。十八歳で「虎ひげ」というのは、さすがにあり得ないでしょう。

作者は、三人の容貌ようぼうを描写するこの場面で、あえて劉備の年齢を引き上げて、読者が違和感を感じないようにしたのだと思います。

『三国志演義』は、もともとが演芸場での講談や雑劇ざつげきとして育ってきたものですから、細かいことをあげつらわず、物語の面白さ自体を楽しめばいいのだと思います。

つぎに、三人の武器を見てみると、劉備は雌雄しゆういっつい一対の双股劍そうこ、関羽は重さ八十二斤きんの青竜偃月刀、張飛は長さ一丈八尺の蛇矛じやぼうで、みんな有名です。しかし、『三国志』にはそんな武器の記述はありません。

劉備は「雌雄一対の双股劍」、つまり二つの劍をふりまわします。この「二つの劍」というのは、『水滸伝』の女傑じよけつである一丈青の扈三娘いちじようせいが使う武器です。さきほど劉備の容貌ようぼうは女性的といいましたが、容貌といい、使う武器といい、主人公の女性的傾向が『三国志演義』の特徴になっています。

これは『三国志演義』にかぎったわけではなく、たとえば『西遊記』の三蔵法師さんざうほうしも、実際の玄奘三蔵げんじようさんざうは二本の足で中央アジア・パミール高原を踏破とうはし、インド各地をまわって仏典ぶつてんを集めて持ち帰るといふ、不撓不屈ふとうふくつの人物でした。

でも、『西遊記』の三蔵法師は、むかしテレビドラマで夏目雅子なつめ まさこさんが演じておられました。が、物語世界の三蔵法師も女性的です。お供の孫悟空そんごくうたちがいなければ一人でもなにもできません。中国の物語の中心にいる人物は、女性的傾向があるというのが特徴です。

劉備・関羽・張飛の三人は、腕っ節の強い者を三百人以上あつめて、乱世に乗り出していきます。

でも「腕っ節の強い」三百人のその後はどうなるのか、気になるところです。ほとんど
の人は、戦いのなかで倒れていったのでしよう。ひよつとして、最後まで劉備につき従っ
た人もいるかもしれませんが。そんな底辺の立場からみた小説があれば面白いでしょうが、
そのような視点の小説には、残念ながらまだお目にかかっていません。

(本文抄)

こうして劉備は義勇兵を率いて各地で手柄をたて、その功績で安喜県あんきけんの尉い(警察署長の
ような役)をあたえられた。

ところが四か月もたためころ、朝廷から黄巾討伐の手柄によって役人となった者は、審
査して適当とみとめなければ免官めんかんするという命令があり、調査のため郡の督郵とくゆう(監察官)
がやってきた。

玄徳げんとくは城外に出迎えて、丁寧に挨拶したが、督郵は馬の上で鞭むちをすこし動かしただけで、
馬から降りようもしない。横柄な態度に、関羽と張飛は二人ともカンカンに腹を立てた。
宿舎につくと、督郵は正面の上座につき、督郵が玄徳にたずねた。

「玄徳どのは、どのような出身かな」

玄德、「それがしは中山の靖王せいおうの末裔まつえいでござる。涿郡たくくんで黄巾の賊を滅ぼしてより、三十あまりの合戦かつせんに手柄てがらをたてましたので、この職にとりたてられました」

督郵はいきなり大声でどなりつけた。

「こいつめ、皇族の名をかたつて、ありもせぬ手柄を申したてたな」

劉備はさからわずに退出して県の役人と相談すると、「督郵がいばりちらすのは、袖そでの下をほしがっているのです」とのこと。

劉備は、賄賂わいろをだす気はもちろんない。すると、督郵は、劉備が人々を苦しめているという偽にせの文書をむりやり作らせようとした。

一方、張飛は、腹はらだちまぎれのやけ酒を何杯ななばいもあおり、馬にのって宿舎の前をとおりかかると、五、六十人の人が、門前で大声で泣いている。わけをたずねると、「督郵が県の役人を捕えて、むりやりに劉備さまに罪をきせようとしております。わたしどもが訴えにまいりましたところ、門番に打ちすえられて追いだされたのでございます」

それを聞くなり、張飛は大いに腹をたて、まるい目をカツとに見ひらき、くろがねを噛かみくだかんばかりに歯ぎしりして、ころげるように馬からおりと、奥の間におどりこんだ。

ちようど督郵は取り調べの最中であり、県の役人たちは縛られて地面に転がされていた。

張飛は大声で、「民をくるしめる泥棒野郎、この俺を知らんのか」

督郵が口をひらくまもあたえず、張飛は督郵の髪の毛をひつつかみ、宿舎からそのまま県の役所の前までひきずって行って、馬をつなぐ柱にくくりつけた。

そして柳の枝を折りとって、督郵を力いっぱい打ちまくり、柳の枝十本あまりを打ち折ってしまった。

劉備は、役所の前がさわがしいので出てみると、張飛が大声にわめきつつ、めった打ちにしている。

「民を苦しめるこの野郎、なぐりころすより仕方がないわ」

くくりつけられた督郵が、「劉備どの、命ばかりは助けてください」と哀願する。

劉備はさすがに仁愛の心の人であるから、張飛を叱って打つ手をやめさせた。

関羽もかけつけて来て言った。

「兄貴は数々の大功をたてながら、やっと与えられたのはちっけな県尉の役職、しかも郡の督郵ふぜいに侮りを受ける。思えば、いばらの中は鳳凰の住むべきところではありません。官をすてて郷里にかえるほうがました」

そこで、劉備は役人のしるしである官印かんいんと綬ひもをとりだして督郵の首にひっかけ、「きさまのような奴は、殺してしまうのがほんとうだが、まあ命だけは許してやる。県尉の印綬いんじゆはお上に返し、おさらばするまでだ」
こうして劉備たちは去っていった。

(解説)

暴れん坊の張飛が酒を飲んだ勢いで、その本領ほんりやうを發揮する名場面です。劉備はそれまでの無位無官むいむかんの身から、官位は低いとはいふものの、安喜県あんきけんの尉ゑいという官職につきませんが、まもなく視察にやって来た督郵が鼻もちならない傲慢ごうまんな男だったため、怒った張飛が半殺しにしてしまいます。

『三国志演義』はもともとが講談ざつげきや雑劇ざつげきとして演じられたものです。観客にとって自分たちがふだん接する役人連中は、たいてい強欲きやうよくで賄賂わいろをとる始末の悪い連中だったのでしよう。そんな腐敗役人の督郵を、張飛が半殺しにしてしまうわけですから、当時の民衆は拍手喝采はくしゅつかっさいして歓迎したことでしよう。また、『三国志演義』の劉備は徹底して「仁愛じんあいの人」として描かれます。これも、為政者いせいしやたるもの、苛斂誅求かれんちゆうきゆうで民衆を苦しめるのではなく、

劉備のような仁愛の人であつてほしいという、民衆の切なる思いが表現されているのでしよう。こういうところも、『三国志演義』が中国の民衆に歓迎されてきた理由の一つだと思ひます。

さて、『三国志演義』では怒つた張飛が督郵を半殺しにするのですが、『三国志』では全く違つた記述になります。

「（劉備）は寢台まで行つて督郵を縛り上げ、引っぱり出して梟境までやつてくると、自分で官印の綬をはずして督郵の頸にかけ、樹にくくりつけて百回余り杖でたたき殺そうとした。督郵が哀願したので、許してやり立ち去つた」（『三国志』先主伝）

じつは督郵を半殺しにしたのは、張飛ではなく劉備だったので。しかも「柳の枝」ではなく「杖で百回余りでたたき殺そうとした」のですから、『三国志』の劉備ほうが『三国志演義』の張飛よりもいちだんと凄味があります。

また劉備については、

「語言少なく、善く人に下り、喜怒、色に形さず。好んで豪快に交わり結び、年少争つて之に附す」

「先主、二人と寝れば則ち牀を同じくし、恩、兄弟の若し。（中略）先主に随つて周旋

し、難険なんけんを避けず」（同前出）

と記述され、歴史書『三国志』と小説『三国志演義』とでは、違ったイメージが浮かび上がってきます。実際の劉備は、乱世を生きぬくしたたかな人物、任侠にんきやうの親分とでもいえましようか。またそうでなければ、この乱世を生きぬくことはできなかったでしょう。

また、牀しやう（寢台）を同じくした劉備・関羽・張飛の関係を、『三国志演義』では「桃園結議」の契りちぎとして描きます。契りちぎとうとなにか肩ひじ張った感じがしますが、三人が出会って心底しんぞこ好きになり、生涯、信頼し合ったということでしょう。

人間が存在するというのは、信じ、愛し、憎んだりという他者との関係を前提とします。であるならば、この関係性の強さは人の心に残ります。劉備・関羽・張飛の三人は「同年同月同日に死のう」と誓い合います。この絆の強さが、読者の心をうちます。

人間関係が希薄きはくになっていく現代にあつて、『三国志演義』から私たちが汲み取ることが多いと思います。